

# 峠の記 上信国境の峠道

## その1 地蔵峠から鳥居峠まで

北端の白砂山に始まる上信国境（群馬・長野県境）は延長約200Kmある。先ず、群馬県の北端を西に向かい志賀高原の最高峰横手山（2304.9m）の山頂を通り、南に向かう。交通の要衝渋峠から山田峠に至り南西に向きを変えて四阿山を通って鳥居峠に至るまでに廃道となった峠や所在の明らかでない峠を含めて9ヶ所ある。ここまでを「その1」として取り上げる。（ここでの4区分は纏めのための都合で区切ったものであり特別な意味はありません。）

### 目次にかえて

名称	2.5万地図	標高	道路種類：所在地(平成大合併前の地名)
1. 地蔵峠	野反湖	1650m	山道：野反湖から白砂山登山道を登る途中、秋山郷切明へ
2. 草津峠	岩菅山	1955m	山道：横手山と鉢山の間、峠としては機能していない
3. 渋峠	上野草津	2172m	R292：R292で横手山の南西を横切り分かれて芳ヶ平へ下る
4. 山田峠	上野草津	2048m	R292：上州から信州への峠道としては機能していない
5. 万座峠	御飯岳	1827m	L466：上信力行の山にあり七味温泉へ下る道は悪路
6. 毛無峠	御飯岳	1823m	L112：破風岳の東、孀恋村小串鉢山跡から高山村牧へ下る
7. 老の倉峠	御飯岳	-	位置不明：上信力行の老の倉山付近と推定される
8. 灰野峠	御飯岳	1779m	廃道：浦倉山と土鍋山の鞍部
9. 鳥居峠	孀恋田代	1362m	R144：四阿山と角間山の鞍部、上信国境北部の幹線道路

太字は2.5万地図に名前が記載されているもの。

上信国境は北の白砂山（2139.7m）に群馬県・長野県・新潟県の3県の分岐がある。この白砂山から西へ、志賀高原の横手山（2304.9m）の山頂を通って南下し、山田峠で南西に向かい万座山から四阿山（2332.9m）を通って鳥居峠、湯の丸山（2101m）で東に向きを変え浅間山（2568m）の最高点近くを通過し、鼻曲山（1655m）で南下し、旧碓氷峠。碓氷峠を通って和美峠に至る。

この辺りで上信国境200Kmのほぼ中間点になる。和見峠から西に向かい八風山から南下し、内山峠から荒船山の長い山頂を縦断し経塚山（1422.5m）で鋭く屈曲し、田口峠の周辺で複雑に入り組むが、後は緩やかに南東に下り十石峠。ぶどう峠を経由して1,974mの無名峰から緩やかに東に向きを変えて、三国山（1796m）で群馬県・長野県・山梨県の3県境に達して終わりとなる。全長約200km、この間にある峠道は廃道、未確認などを含めると35以上あり、2万5千地図に峠の名の記載のあるものは24ある（峠と言う名称は使われていないもの2を含む）。標高2000mを越えるもの3、1000m未満はわずかに2、大部分が標高1000mを越えている。

峠は山波によって隔てられた人々の暮らしを繋ぐ道。峠を通って山のむこうの人々の暮らしが伝えられ、物とともに世間の動きや噂話も伝わる。夏の強い陽射しを浴び、汗をながして峠に登りつき、木陰で一息入れ里へ下って行く。木枯らしが吹き雪がきて峠道は閉ざされ、春の陽射しが雪を融かし再び峠道が開かれ、人々の往来が復活する。峠には多くの人の思いが残され、峠のむこうの町への憧れをかき立てる。こうした峠の行き来だけでなく、時には親に許されぬ恋人同士がやむにやまれず駆け落ちし、峠で故郷をすて親を捨てる不孝を詫びながら、故郷の最後の姿に涙ながらに別れを告げたのだと言う昔話しを、若い頃に民宿の囲炉裏端で聞いた覚えがある。

## 1. 地藏峠 1650m (吾妻郡六合村～長野県下水内郡栄村)

2004年7月28日

1998年8月23日に白砂山登山の途中この峠を通過しているが、ほとんど何の印象もなかったため、2004年7月28日再訪することにした。台風10号が接近中であったが、八丈島東海上にあるのでまだ影響はほとんどないと判断して出掛けた。雲は多いものの穏やかな夏空でかなり蒸し暑い。車で白砂川に沿ってR405を六合村の花敷温泉、尻焼温泉への道を分け、山道に入り野反湖へ向かう。野反峠は観光客で賑っているのを横目で見、湖岸をダムサイトに向かう。堰堤の少し手前に白砂山登山口(1430m)がある。先客は2台の車、多分白砂山を目指しているのだろう。



地藏峠

ここで身支度をして10:00出発。いきなり泥の滑りやすい道を登る、辺りは笹原で容赦ない日差しが暑い、急な坂道を標高差70mほど登った所で対岸の三壁山、高沢山、エビ山の連なりを眺めて汗を拭き息を整える。ここから木陰に入り、急降下でハンノキ沢を渡る(1480m)。しっかりした丸木橋が渡されているが、以前白砂山へ来た時は飛び石伝いだったと思う。再び急登だが木陰なのであまり辛くはないが展望も利かない。これと言った特徴のない山道をひたすら登る。



お地藏様

標高1600m辺りで分岐があり、左は東電の巡視路で切明の発電所へ向かう。右を更に登ると再び分岐があり、見上げると道標があった。まっすぐ登ると堂岩山を經由して白砂山へ、左に下ると切明から秋山郷へ。ここが地藏峠なのだ。峠という地形ではなく山の斜面の途中の分かれ道といった感じである。右斜めに登る道があり、チョット入ると屋根の付いた小屋の中にお地藏様が鎮座していた。これが名前の由来のお地藏様なのであろう、お賽銭が幾つか上げられていた。以前来た時はこんな道標はなかったので峠の印象はほとんどないわけである。出発から45分ほ

どである。汗を拭き、お茶を飲んで、写真を撮る。展望もなくあっけない終着点、念の為切明の方へ少し下ると左手に木の葉の隙間から大きな山塊が見える。鳥甲山かなと思ったが、近過ぎるので地図をよく見る。多分岩菅連山の末端であろうと思うが全体が良く見えないので岩菅連山のどの辺りなのかは判然としない。11:00もときた道をひき帰す。ハンノキ沢まで一気に下り、ここでゆっくり休憩。綺麗な沢水で白砂登山の時にも帰りにここでゆっくり休憩したことを思い出した。



この峠には江戸末期の優れた官僚小栗上野介にまつわる話がある。徳川幕府の高級官僚であった小

栗上野介は徳川の職を辞し所領の倉淵村権田(高崎から6里、R406)へ隠棲したが、官軍の追及激しく、ついに奥方始め家族を会津に避難させることとなった。権田から大戸を通り、草津へそして、野反(まだ野反湖は出来ていない)から地蔵峠を越えて切明、秋山郷へと逃れた。このときの地蔵峠越えは難渋したと言われている。小栗上野介は途中から権田へ引き返したが、官軍に捕らえられ、切腹も許されず斬首となったということである。



**野反峠より野反湖**

注 : 地蔵峠と言う名は各地にあり紛らわしいので今後文中では周辺の地名を付けて呼ぶ事にしたい。さしずめ最初の地蔵峠は野反地蔵峠としたい。現在では白砂地蔵峠の方がふさわしいようにも思えるが、この峠の由来から野反とした。上信国境にはもう一つ地蔵峠がありこちらは鹿沢地蔵峠と称することにしたい。こちら湯の丸地蔵峠としたほうが良いかとも考えたが、地蔵峠の由来の百番観音が鹿沢にあるので鹿沢を採った。

注 : 国道は国道00号線と言う標記の他、R00と略記する。地方道はL00と略記することがある。

## 2. 草津峠 1955m (吾妻郡六合村～長野県下高井郡山ノ内町)

2004年9月1日

野反地蔵峠から西に伸びる国境山稜上には峠がない。野反湖の堰堤を越えて、山稜に登ると三壁山、高沢山、大高山、ダン沢ノ頭、赤石山と国境稜線は西へ西へと進み四十八池から南下し鉢山を下ると草津峠に至る。2000m級の山々が連なるこの国境稜線は殆ど歩かれておらず、野反湖から三壁山、高沢山、志賀高原の大沼池から赤石山が一般に登られているに過ぎない。

渋峠に車を置いて横手山に登る。この道はNTT コミュニケーションズと横手山山頂ヒュッテの専用道路で一般の車は入れない。緩やかな車道をゆっくり40分ほど登ると、パラボラアンテナの林立する山頂に達する。渋峠からのリフトと覗きからのリフトが山頂まで来ていて多くの人達がリフトで気軽に山頂に現れる。渋峠からのリフトの脇に神社の鳥居があり、鳥居をくぐって横手山頂の二等三角点 2304.5mに達する。足元は急なガレの斜面が落ち込んでいて、すぐ目の下にR292の道路と小さな展望パーキングがみえる。



目を上げると浅間山が、手前には白根山が見え、その手前には山田峠が見える。

**横手山山頂**





### 山頂より浅間山、山田峠

(この日午後8時過ぎ浅間山が噴火し、バーンと言う大きな爆発音が草津でも聞こえたが、我が家からは噴煙はもちろん浅間山も見えない。)

この山頂は広くパラポラアンテナとヒュッテやリフトの小屋が目障りだが展望は素晴らしい。暫く展望を楽しんだ後、山頂ヒュッテの前を横切り草津峠に向かう。暫くは林の中の急降下、20分ほど下ると山頂からのスキーコースにぶつかる。左手には覗きのロッジが見える。再び林の中に入りぬかる

んだ道を小さなアップダウンを繰り返しながら、次第に高度を下げ草津峠に至る。草津峠は林野庁の説明板があるが峠らしい地形ではなく、説明板のすぐ脇にガラン谷へ行く中電水路の入口が藪に覆われ、立ち入り禁止のロープを張られている。少し下ると硯川からの道と四十八池への道を分ける三叉路に達する。ここのベンチで少し遅い昼食を取り、バスの時刻を調べるところから下ると丁度良さそうな時間になると計算して、四十八池や鉢山は割愛して硯川を目指す。道幅は広いが路面は荒れている、所々に舗装の跡がある。砂地のせいか道端にモジズリのピンクの可憐な花が目立つ。予想よりだいぶ時間が掛かり、ようやく横手山からのスキーコースにでた。



草津峠説明板

暫く草地の柔らかい感触を楽しみながら下ると、硯川のバス停からバスが上ってくるのが見えた。頃合を見計らって車道に出て手を振るとバスが止まってくれた。有難い、お礼を言って乗りこむ。終バスの1本前のバスに乗れたのだ、バスは陽坂、覗きと止まり次は渋峠。ここで下りる約20分、歩いたら多分3時間はかかるだろう。車に戻り靴を履き替え、今日の旅はこれで終わりである。

草津峠は林野庁の説明板にあるとおり、渋峠の道が危険なので、硯川から草津峠に登り、横手山の頂上を経ずにガラン谷の上部をトラバースして渋峠に至り、芳ヶ平を経由して草津に至ったものと思われる。ガラン谷の上部を横切る道の一部は中電水路である可能性は考えられるが、現在の地図に記されている中電水路は渋峠を経ずに、直接芳ヶ平に出ているので、これも旧草津峠道である可能性も十分考えられる。



横手山頂より左から手前は本白根山、遠くに浅間山、鹿沢の連山、四阿山、根子岳

峠の名前は行き先の地名を宛てることがしばしばある。渋峠は草津から芳ヶ平を経て渋へ向かう峠

として「渋峠」と名付けられ、渋から草津へ向かう峠として「草津峠」と名付けられている。この点から当初私は草津から渋へ向かう最初の峠が渋峠であり、渋から草津に向かう最初の峠が草津峠で渋峠と草津峠は横手山の頂上を経ず山頂を巻いて繋ぐ（横手を通る）のではないかと考えていた。歩いてみて感じたのは、当初から1つの峠は1セットになって機能しているのではないかと考えていた。歩いてみて感じたのは、当初から1セットで作られたものではなく、草津峠は林野庁の説明板にあるとおり、渋峠の危険性を避けるための補助的な峠であるということを実感した。

3. 渋峠 2172m (吾妻郡六合村～長野県下高井郡山ノ内町)

4. 山田峠 2048m (吾妻郡草津町～長野県下高井郡高山村)

1959年3月6日

この2つの峠はR292志賀草津道路として4月下旬の開通から例年であれば11月下旬の閉鎖まで多くの観光客の車やバスが列をなして通る峠である。草津に住み着くようになってからこの峠の閉鎖は冬の到来を身に沁みて感じさせるものがある。初雪の早い年には11月上旬にR292が閉鎖になり、草津から信州へ行くには鳥居峠を通り遠回りをするしなければならず、袋小路に住んでいることを実感する。そのかわり、4月下旬大型連休を前にした開通は春本番の開放感が溢れる。この道が車に解放される直前の日曜日には恒例のヒルクライム自転車レースが行われ、雪壁の残る道を自転車が快走する。



芳ヶ平への下り入り口の渋峠道標

渋峠は草津峠の項で述べたように、上州草津温泉と信州渋温泉を結ぶ重要な道であった。開設は明らかではないが、健久6年(1195年)源頼朝が草津から島崎(山ノ内町)を通り善光寺へ参詣したという伝承があるそうだ。現在は崩壊の激しい横手山の山腹をシェルターに守られて通過し、志賀高原にいたるR292の重要な峠である。

一方、山田峠は芳ヶ平で渋峠への道と分かれ、信州松川溪谷へ至る峠道であった。松川溪谷に沿って下ると信州須坂に至るが、現在は芳ヶ平、松川溪谷七味温泉間は廃道になっており峠の名前は残っているが、本来の峠道としては機能していない。



横手山をバックに山田峠の古い道標

渋峠の南200mほど国道最高点標識







R292 の渋峠側から山田峠を見る。左:草津白根山



1959 年当時の渋峠ヒュッテ

毛皮を持っている者など稀有の存在だった。朝から素晴らしい晴天にめぐまれ、順調に横手山頂に達し、シールならぬ藁縄を解いて一気に渋峠ヒュッテを目指した。この辺りは現在でもスキーゲレンデになっている快適な斜面、渋峠ヒュッテで一休みして、現在の R292 とほぼ同じコースを山田峠へ下る。山田峠は風の通り道で霧の発生が多く遭難の名所と言われ避難小屋も建てられているが、この日は素晴らしい晴天で見晴らしがよく、峠で止まることなくスピードを上げて一気に通過し対斜面の登りのアルバイトを軽減する。あとは緩やかに下りながら万座温泉への下り道を探し当て、温泉に直行した。

草津白根山を正面に山田峠へ向かう



この2つの峠を初めて通過したのは志賀草津高原ルートが開通する1965年より前の1959年3月6日、志賀高原で友人達とスキーを楽しみ、腕自慢を誘って帰りは自動車賃の節約を兼ねて、万座温泉から帰ろうと丸池から熊の湯へ。横手山のリフトは中腹までしかなく、山頂まではスキーに藁縄を巻いて登った。当時はナイロンシール等なく、本物のアザラシの



当時の万座の温泉宿は二軒だったように記憶している。宿(たしか豊国館と言った)に着くとまず冷たいブドウジュースが出される。冷たくてほんのり甘く、ヒョットしたら少しは発酵してアルコールになっていたかもしれない山ブドウジュースは忘れられない味であった。この宿の露天風呂は崖の上に突き出したような形で周囲に全く囲いはなく、遙かな雪の山々と谷間の森を望む開放感、夕暮れには少し早い時間だ

遠く浅間山を望む志賀万座スキーツアーコース

が静かな山間の温泉気分溢れる別天地であった。

(モノクロ写真は 1959 年当時の写真)

5 . 万座峠 1827m ( 吾妻郡嬭恋村 ~ 長野県上高井郡高山村 )

7 . 毛無峠 1823m ( 吾妻郡嬭恋村 ~ 長野県上高井郡高山村 )

2003 年 10 月 24 日

6 . 老の倉峠 ( 所在地不明、嬭恋村 ~ 上高井郡高山村 )

8 . 灰野峠 1779m ( 廃道。吾妻郡嬭恋村 ~ 長野県須坂市 )



浅間山、白砂山が初冠雪と聞いた日、兎に角高いところへと車を走らせた。当然 R292 を白根火山に向けて走る事になる。北アルプスが真白に雪をかぶって見事だ。北アルプスの展望台としては R292 よりも万座峠からの上信スカイラインの方がよいと判断し、一旦万座温泉に下り万座峠へ向けて登る。素晴らしい晴天、おまけに見事と言しよう

のない霧氷があたりの木々を覆っている。万座峠での展望よりこの滅多に出会えない霧氷を追って見る気になり、老の倉山の手前から上信スカイラインを外れて行き止まりと表示のある毛無峠へ向かう。



**毛無峠** 道は少し細くなり舗装も良くはないが毛無峠までずっと続いている。所々で車を止め写真を撮る。こんな素敵な日にここに居られることを感謝しながら。この日ここへ出向いた人が 2、3 人いずれも幸運にニコニコしながら挨拶し、それぞれ眺めたり、写真を撮ったりするのに余念がない。この辺りの紅葉の終わりに近く、ところどころに紅葉を残し、ナナカマドの赤い実が鮮やかだ。

**毛無峠より浅間山**

毛無峠では浅間山が見事で、振りかえれば、妙高山を中心とした頸城山塊、北アルプスは破風山の陰に隠れてしまうが、途中では白馬三山、唐松、五龍、鹿島槍と続く後立山連峰が一望に出来た。風の強い毛無峠は寒くあまり長居はできないが眺望をたっぷり楽しんで帰路につく。毛無峠の上州側は今は廃墟となっているが小串鉦山跡があり、ここから運搬リフトで毛無峠を越えて、信州上田へ硫黄が運ばれて





いた。嘗ては重要な峠であり、信州側には今は荒れているが硫黄搬出のトラック道が残っている。小串鉱山には相当多くの人々が働いていたと思われ、峠には鉱山で働いていた人達の慰霊碑が残る。



いまは荒れ果てた草もロクにない(当然木はなく、木無峠だったのであろう。)裸の砂礫地が峠の両側を覆っている。硫黄鉱山であるから草木が生えないのは当然であるが、寒風の吹き通る、いか

毛無峠の西に右破風岳 1998mと左土鍋山 1999.4m

にも廃墟に相応しい風景の峠であった。

左から土鍋山、破風岳、見事なスプーンカットの毛無峠、右に毛無山と御飯岳 2160m 2005.2.9 浅間隠山より



**万座峠** 万座峠は上州万座温泉から峠を越えて信州松川温泉郷に通じる道がいまでも存在する。



峠道は万座山 1994mと黒湯山 2007mの鞍部を通る。上州側は万座温泉スキー場の一部であるが、信州側は急峻な崖を下る悪路で、車が通れることになっているが、道路崩壊のため通行止と表示されている時の方が多いように思う。

万座峠より横手山

万座峠の道は戦国時代は軍道であったとされ、上州長野原の羽根尾氏は万座の湯に入浴中居城への道を塞がれ、万座峠を越えて信州高山村へ逃げのびたと「加沢記」に記されているそうである。

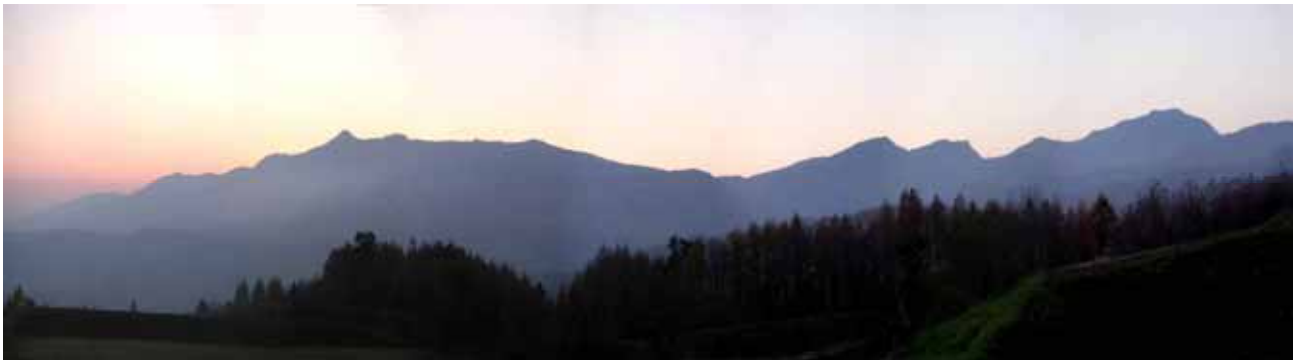
万座峠から松川溪谷への荒れた下り道





**老の倉峠** 地図上には標示がない。峠道のマニア Knos さんのホームページで初めて知った峠であり、Knos さんも存在を知ってはいるが場所を同定できていない。老の倉山の東の付根辺りではないかと想像されるが、嬭恋村から信州高山村へ通じる峠としか知られていない。上信スカイラインはその名の通り上信国境を走っているが、老の倉山の周辺として考えると、信州松川溪谷（高山村）へ下るというのは至極当然と考えられるが、上州側は嬭恋村と言っても万座温泉側なのか、或いは小串鉦山側から松川を目指したものなのかさっぱり分からない。老の倉峠は何時頃から存在し、何時頃に廃道となってしまったのか、まだまだ調べてみなければならないことが沢山ある。後に、更に詳しく現地を調べたところ、万座温泉側から黒湯山、御飯岳、老の倉山の三山が作る最低鞍部を上信スカイラインが通る地点（丁度スカイラインが上信国境を横切るあたり）に上州側からの幽かなふみ跡があるのを見つけた。老の倉峠道が比較的最近まで利用されていたとすれば此処も候補になりうると思う。

**灰野峠** 灰野峠は四阿山の北にある浦倉山 2090mと土鍋山 1999mを繋ぐ緩やかな稜線の最低鞍部である。上州側は嬭恋村の干俣の集落から灰野峠へ登り、信州の須坂市豊丘区灰野に至る峠道で古くは三原道といわれ、上州から須坂に至る最短距離の峠であった。峠から枝分かかれは米子不動道でもあり、善光寺道としても古くから使用されていたと言われる。嘗ては多く利用され峠には茶屋もあったと伝えられるが信州側は四阿火山のカルデラで極めて険阻な断崖であり、大正末期に廃道となったと伝えられている。現在は全く取り付くことも出来ない状態である。嬭恋パノラマロードの中間点干俣の集落から新たに毛無峠への道が作られており、この道路が灰野峠にかなり近い所を通るので、いずれはもう少し詳しいことが分かるようになるかもしれない。（老の倉峠、灰野峠は2.5万地図に標記なし）



鳥居峠 四阿山 浦倉山 灰野峠 土鍋山・破風山 毛無峠 御飯岳

2004年12月関東全県の県境を踏破に成功した上野信弥さんが「山と溪谷」2005年6月号に県境の山、いろいろランキングとして、「展望がいい県境ベスト3」に天然ベッドが広がる広大な鞍部、浦倉山・土鍋山鞍部として紹介しているのは、灰野峠であろうと思われる。このなかで「今は登山ルートができたようだが、変わってほしくない鞍部だ。」と述べている。

## 9 . 鳥居峠 1362m（吾妻郡嬭恋村～長野県小県郡真田町）

2004年3月9日

鳥居峠はR144 嬭恋村から信州上田へ或いは菅平へ向かう重要な峠道であり、上信国境北部の峠道として通年通行が可能な数少ない貴重な峠でもある。R292 が閉鎖になると長野方面へ行くにはこの峠が唯一のたよりである。上州側は浅間山を見ながら緩やかに登って峠に達することが出来るが、信州側へ下る道は急な下りで急カーブも少なくなく雪の季節は結構緊張する。



鳥居峠も日本武尊の伝説がかかわっており、尊が碓日坂を越えた時に「吾嬬はや」と嘆いたといわれたことからこの東の地域を吾妻郡 吾妻川 吾妻山（四阿山） 嬬恋村などの地名がつけられたと言う。しかし、碓日坂が現在の入山峠であるとなると随分遠くだなと思ってしまう。

それはさておき、江戸時代には鳥居峠を越えて北信と上州を結ぶ大笹街道が北国街道の脇往還として注目されていた。大笹街道は上州大笹宿（嬬恋村

大前と田代の中間）から鳥居峠を越えて北国街道福島宿（現須坂市）へ至る道であるが、北国街道は須坂から仁礼宿にいたる仁礼道、善光寺から保科を通る保科道、上田から真田に至る大日向道の3本があったがいずれも信州側鳥居峠で合流し大笹宿へ向かっていた。北信から江戸へ行く場合大笹街道を通ると距離も短く北国街道を通るより1日早く江戸に着くことが出来たといわれている。



**古くは油峠、碓去来峠、ズラとダッペの国境など別名が多いのはそれだけ利用が多かったという証であろう。**

参勤交代には使われなかったが通商路として善光寺平の米・菜種油・大豆・麻・紙・煙草などが運ばれ、特に菜種油は大量に運ばれたので別名を「油峠」とも呼ばれたということである。帰り荷は上州から塩・茶・小間物・砂糖・太物（綿・麻織物）などの雑貨類が峠を越えて信州へ運ばれた。渋峠を通る草津道とは競合関係にあり、沓野村（山ノ内町）は耕地が少なく山稼ぎが多かったので消費人口の多い草津温泉への物資の輸送は重要な現金収入の道であり、鳥居峠を越えるより、渋峠を越える草津道の輸送は重要な利権であり、仁礼宿、大笹宿などとの利権争いが絶えなかったと言われる。



**鳥居峠 嬬恋村田代より浅間山**



明治 11 年鳥居峠の南方 500mの地点に新鳥居峠を開削し、昭和 5 年この峠道に自動車道が開削されこれが現在の R144 である。また、緊急時に大本営を長野県松代町に移転するとか、上田に軍の拠点をなどと言う不穏な動きの中で、国鉄吾妻線を大前から鳥居峠をトンネルで抜けて上田まで延伸するなどと言う噂もあった。しかし、現在は R144 はまさに「キャベツロード」として日本一のキャベツ村嬭恋村の大動脈として機能している。



平成の大合併とやらで大いに苦労をさせられました。古い資料の地名と新しい地図の地名が一致しないので、少し古い地図と 2 段構えということも少なくありませんでした。地名と言うのはその土地の履歴書みたいなものだと思います。昔からの地名をもっと大切にしてほしいものです。

行政の効率、観光、イメージなども決して無視するわけではありませんが、結局、過去の経緯を云々して逃れられないしがらみに苦労するよりは、当たり障りのない曖昧な、婉曲な言い方で逃げを打っておいて責任を逃れようとする気持ちの表れではないでしょうか。そんな気持ちが新しい地名には散見されるのも残念です。

草津周辺の峠を車で走っていたときにフト上信国境の峠を全て訪ねてみたら如何だろうという気持ちが湧いたのです。70 歳を目前にして、だんだん山へは行けなくなってきたが、山を眺める楽しさは失いたくないという気持ちもありました。山の先達大島亮吉は「峠は自然が作ったものであるが、峠は人間の作ったものである。」といている。頂上は無理でも峠は山屋でなくても歩く道で

すから、「老後の楽しみ？に適當ではないか」と安易に思ったりもしました。そして、「上信国境の全峠を踏破してみよう！」こんな課題を自ら課したのは、2003年の初冬に knos さんの HP を拝見した時でした。Knos さんの HP の中に、岩佐徹道著「群馬の峠（上・下）」が紹介され、偶々同姓だったのでどんな方かと Knos さんにお尋ねのメールを送りご返事を頂いたのが、深みにはまるキッカケでした。

『峠の記』その2 . へ続く